

木造化された当麻町の役場庁舎

－ 見学会報告 －



当麻町は、「木から学ぶ（木育）、木を育てる（林業）、木の活用（町産材）」を、まちづくりの大きな柱としてかけ、町産材の活用を積極的に進めています。これは、当麻町の面積の65%が森林で、林業が農業と並ぶ大切な産業となっているとともに、民有林の約5割を占める人工林の8割が林齢40年を超え、伐期を迎えているという、多くの林業地域に共通する背景があります。

町が取り組んでいる具体的な「木の活用」例としては、町内に戸建て住宅を新築して居住される方への町産材提供のほか、公営住宅の木造化、公共施設への町産材利用等があります（表1）。耐震性の不足が明らかになった役場庁舎の建替においても、町産材の活用が図られ、第1期工事（図1）が2月末に完了し、3月5日から木造庁舎での業務が開始されています。

当協会では、新築となった役場庁舎の見学会を企画し、去る6月7日、協会会員および林産試験場職員

等19名が当麻町を訪ね、お話を伺うことができました。そこで、菊川当麻町長へのインタビュー内容を含め、木造庁舎の概要をご紹介します。

◆新庁舎の特徴

新庁舎の特徴は、次のとおりです。

- ①構造材、家具材、造作材のすべてに町産材を使用し、「地材地消」を図った（表2）。
- ②木材の新乾燥技術（コアドライ）によって、町産カラマツを4寸柱として使用した。
- ③CLTを執務室の天井の一部に使用した。
- ④執務室空間をワンフロア化し、来庁者にわかりやすく、かつ利用しやすい配置とした。
- ⑤職員が来庁者と対面に対応するワンストップ窓口サービスを導入した。
- ⑥議場を多目的に利用できるように、議場の木製家具はすべてキャスター付き移動家具とし、議会閉会中は用途に合わせて家具の配置を変更できる仕様とした。
- ⑧新在来木造軸組構法を採用し、地元雇用の促進と町産材活用による地域経済の活性化および林業振興を含めた地域貢献を図った。

表1 町産材を用いた建築物

建築物	オープン	木材使用量 m ³	使用樹種
公営住宅(16戸)*	2011.1	215.3	トドマツ
子育て総合センター	2012.4	154.9	カラマツ、トドマツ
公民館まとまーる	2014.4	98.8	構造材:カラマツ・トドマツ 造作材:カバ・ニレ・タモ・セン
くろみなの木遊館	2016.5	235	カラマツ

* ~2015年度:56戸, 2016年度:12戸

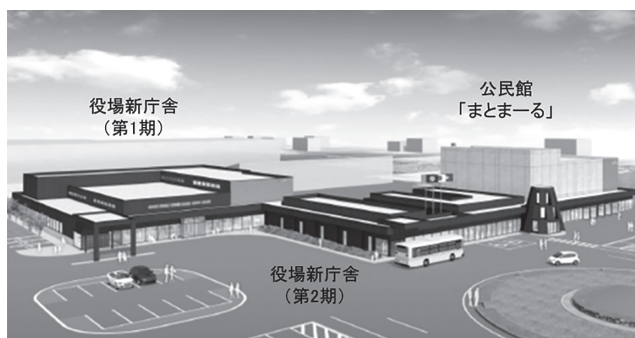


図1 当麻町役場庁舎の外観

表2 使用されている木材

材料	樹種	使用量 (m ³)
構造用集成材	カラマツ	287.4
CLT	カラマツ	4.0
構造用製材(コアドライ)	カラマツ	27.7
羽柄材	トドマツ	311.1
構造用合板	トドマツ	239.1
フローリング	カバ	11.1
階段	ナラ	1.6
三層パネル	カラマツ	5.8
合計		887.8

◆新庁舎に対する町長の思い

○基本方針

100%町産材を使った在来木造とする、専用議場を廃止する—はじめからこの二本柱は崩さないことを決め、それを町民が受け入れてくれた。特に、木材については構造材はもとより、家具から額縁まですべて町産材を使うことにこだわった。

先代が植えて育てた木を庁舎に甦らせる、専用の議場を作らず多目的に使う、など分相応の庁舎にした。今、これらのことが求められている、ということ町民に受け止めてもらえたと感じている。

○身の丈

大断面にしないで、在来工法にこだわった。そのため、執務室の中も、私の部屋の中も柱が立っているが、そのことによってコストダウンにつながった。オーソドックスな建て方なので、地元の大工さんもかかわることができた。

外装は鉄板張り、事務所の中は全部石膏ボードのペンキ塗装。こんな質素な役所庁舎は他にないと思う。しかし、こうすることでメンテナンスが容易になるし、コストダウンにもなった。

床、一部の天井、梁、柱のすべてを現しにしているので、さらに壁まで木を使うと、少しくどくなる場所があった。石膏ボードにペンキを塗ったことで、柱や梁がスマートに見えるので、デザイン的にも良かったと感じている。

私たちは、何も贅沢なことをしているわけではなく、町内の木材を使っただけの建物を建てた。それにもかかわらず、町民の皆さんが、あるいは来庁された皆さんが立派な庁舎だ、すばらしい庁舎だと言ってくれるのは、木の良さがにじみ出た建物だからだと思う。

建築面積は、従来の3500m²から800m²ほど小さくなって2700m²となっている。これは、専用議場を廃止したことが、大きな要素となっている。身の丈に合った建物を建てようと考え、そのこともコストダウンにつながった。

私が町長になる前、役所が発注する建物はブロック、RCで、木造ではなかった。町長に就任早々、公営住宅は木造に切り替えた。そのことによってコストダウンになった。この庁舎もRCで建てるよりも、おそらく2割以上は安くなっているし、地域の活

性化にもつながっている。

○カラマツ

カラマツは道産材としてなじみの深い木材ではあるが、今までは、ねじれと松ヤニ処理の問題で利用しにくかった。当麻町で住宅を建てる方に提供しているのはトドマツで、カラマツは住宅の構造材としての実績はなかった。それが、林産試験場の新しい乾燥技術で使えるようになったことが、私の心に響いた。

庁舎でカラマツを使うことが、カラマツについての新たな発信になればどんなに嬉しいだろうな、という思いがあった。使ってみると、カラマツ独特の香りの良さがある。若干、割れは入るし、ねじれが生じるかもしれないが、木は本来そういうものであって、そのことを私たちも受け入れることが必要だと考え、全面的にカラマツを使った。トドマツに次いで、カラマツも建物に立派に使えることを示せたものと思う。

私の机の天板はカラマツ（写真1）。職員の机の天板も全部カラマツ。柔らかいので傷はつくと思うが、私は傷がついてもいいと思う。



写真1 カラマツ3層パネルを天板にした執務机の前に、町産材利用を語る町長

○木造でやるべき

木造の難点は、大断面にすれば別であるが、間取りに制約を受けることがある。RCの方が設計はしやすいだろうし、管理もしやすいのかもしれない。木造の方がたしかに大変な部分はあると思う。ただ、その苦労はたいした苦労ではない。木造には町産材を活用する喜び、楽しみがある。

今、バイオマス利用が注目されているが、建築物に利用できる木材はそこに利用することにこそ価値

がある。そのことを、この庁舎から少しでも発信できればと思っている。バイオマス利用は、それはそれで使命があり、重要だけれども、木を使うという意義は、やっぱりこういう建物として活用することによって示すことができると考えている。

○次の100年へ

床や階段に使った広葉樹も町産材である。樹齢がほしい150年で、北海道150年とちょうどマッチする良い時期に、北海道が誕生したときの木を庁舎に生かした。

建築事業者の提案は、100年使えます、ということだった。だから、私は100年のスタートを切ったと思っている。70年後、100年後になったら、柱や梁は黒ずんでいるかもしれないが、歴史的価値のあるものになっているに違いない。そのためには、途中で補修も必要となるが、それが可能なのが木造の良さなのだと考えている。

◆見学会での説明内容

庁舎新築の背景、経過、構造、使用樹種等についての説明、および質疑の概要は次のとおりです。

- ・大断面集成材構造と在来構造とではコストが異なってくることから、「新在来軸組構法も可とする」と明記したプロポーザルを行い、結果的に在来構造が採択された。
- ・在来構造のため執務室に柱が立っているが（写真2）、執務に特段の支障は生じていない。
- ・議場は柱を林立させることができないので、トラス構造として広い空間を確保した（写真3）。
- ・執務室をワンフロアとすることで音が気になりであったが、天井高が5.5mと高いため、特に気になることは生じていない。
- ・使用した原木は20cm換算で2万本、約3千m³となった。これらは、当麻町森林組合が計画段階の早い時期から庁舎にふさわしい木をチェックしていたので、図面ができたらずぐに行動に移せた。
- ・CLTは、将来的な間仕切りの変更に耐えられるよう、天井の水平耐力を保つ構造材として使用した。
- ・庁舎の建設を、工事契約ではなく、建設買取事業とすることで、コストダウンが図られた。なぜかと言うと、公共建設の場合は、道の単価表が基準になるが、建設買取の場合は、全て民間の価格設

定になるからである。

- ・プロポーザルは町側から細かな建築条件を示す必要があり、それを作成するのに大きな労力を伴うが、公営住宅、木遊館でのノウハウが、今回の庁舎建替に活かされた。

菊川町長のお話の中で、そして見学会の中で繰り返し強調された「町産材の活用」。構造材から、建具に至るまで町産材を使うことに徹底的にこだわったことが、実際の建物を見学する中でも感じることができました。

町産材活用によるまちづくりを丁寧にご説明いただいた菊川町長、見学会に対応いただいた菅野課長補佐をはじめとする建設水道課の皆さまに深く感謝いたします。

（文責 菊地伸一）



写真2 柱が現しになっている執務室



写真3 トラス構造の多目的議事堂